PETER BARAKAN'S 30+ RECOMMENDED VINYL RECORDS

※記載の西暦はマスターリリース年です。



ピーター・バラカンのおすすめLPレコード BEST30+

RECOMMENDED by PETER BARAKAN

SELECTION — 01



Muddy Waters

The Best of Muddy Waters
(1958)

1950 年代前半にシカゴ・ブルーズの原形を作った張本人の名曲名演を集めたアルバム。洗練とは縁のない骨太な演奏ですが、本人のスライド・ギターの他、リトル・ウォルターの天才的なハーモニカ、ジミ・ロジャーズのギターなど、達人たちのサポートもあって今もかがやく音楽です。

SELECTION — 02



Marvin Gaye

What's Going On
(1971)

1971 年にソウル・ミュージックの定義を改めさせたコンセプト・アルバム。それまでモータウン・レコードのロマンティックなスター歌手として人気が高かったマーヴィン・ゲイはヴェトナム戦争をはじめ、様々な社会問題に目を向けた、ややジャズ寄りの組曲の形をとった名盤です。

SELECTION — 03



Donny Hathaway

Live
(1972)

音楽理論まで学んだドニー・ハサウェイはピアニスト、編曲家、プロデューサーとして定評がありましたが、1972 年のこの傑作ライヴ・アルバムでは歌手としての存在も聞き手を圧倒しました。「ユーヴ・ゴット・ア・フレンド」や「ザ・ゲトー」など、永遠の名演が多いです。

SELECTION — 04



Jaco Pastorius

Jaco Pastorius
(1976)

デビューしたころから本人が自ら「おれは世界一の電気ベイス奏者だ」と豪語していましたが、演奏を聞くと反論する人はいなかったはずです。1976 年のこのデビュー作では主にフレットレス・ベイスの可能性を時にはファンキーに、時には叙情的に追求しています。脱帽。

SELECTION — 05



Miles Davis

In A Silent Way
(1969)

1969 年にマイルズ・デイヴィスが 3 人の電気キーボード奏者（ハービー・ハンコック、チック・コリア、ジョー・ザヴィヌル）、そして 2 人のイギリス人（ギターのジョン・マクロクリンとベイスのデイヴ・ホランド）を含むバンドでタイトル通りの静かなジャムを見事に展開しました。

SELECTION — 06



Bob Dylan

Freewheelin'
(1963)

ディランが 22 歳の誕生日を迎えた直後に発表された 1963 年のこのアルバムはフォーク・・ミュージックに革命を起こしました。伝統曲のメロディを借りて、歌詞では独自のラヴ・ソングから戦争や人種差別などの時事問題を鋭く、そしてユーモラスに取り込んでいます。

SELECTION — 07



Dr. John

Gumbo
(1972)

1972 年に発表されたこの作品で、それまでサイケデリックな音楽を作っていたドクター・ジョンはいきなり方向転換し、故郷のニュー・オーリンズで 1940 年代から 50 年代にかけて育まれた R&B の音楽文化を真っ向から取り上げました。これをきっかけに世界中の音楽ファンが魅了されて行ったのです。

SELECTION — 08



Professor Longhair

New Orleans Piano
(1972)

ドクター・ジョンのアルバムの直後に、それまでほとんど知られていなかったピアニストのプロフェサー・ロングヘアのSP 盤時代の音源が初めて LP にまとめられました。ブルーズとブギーとラテンの影響が独特なスタイルで合わせさったその素晴らしい演奏が注目され、50 代で脚光を浴びました。

SELECTION — 09



Little Feat

Dixie Chicken
(1973)

個人的には最も好きなロック・バンドの最高傑作です。1973 年に出たこれは彼らが再生をかけた 3 作目で、当時ヒットしたわけではありませんが、特にミュージシャンに好まれる作品です。ロックといってもブルーズ、ファンク、カントリっぽいところもあり、唯一無二の存在です。

SELECTION — 10



War

The World Is A Ghetto
(1972)

グループ名は誤解を招きそうですが、逆に平和と共存を訴えた曲が多く、ありとあらゆるジャンルの音楽を独自のスタイルに取り入れているところが魅力的です。1972 年 の このアルバムはヒット曲「シスコ・キッド」も収録されていて、そうとうな人気作でしたし、名盤です。

SELECTION — 11



Fairport Convention

Unhalfbricking
(1969)

イギリス型フォーク・ロックを確立したフェアポート・コンヴェンションは 1969 年にアルバムを 3 枚も発表しました。どれも素晴らしいですが、個人的にいちばん心に刻まれているのはこの不可解なタイトルの作品です。サンディ・デニーの天使のようなヴォーカルにはうっとりします。

SELECTION — 12



The Band

Music From Big Pink
(1968)

我々が現在「ルーツ・ミュージック」と捉えているものはこの 1968 年の大傑作から生まれたといっても過言ではないでしょう。当時は青天の霹靂で、流行していたヘヴィーでサイケデリックなロックに対する完全なアンチテーゼだっただけに理解されるのに少し時間ががかった名盤です。

SELECTION — 13



Van Morrison

Moondance
(1970)

北アイルランドのベルファストでアメリカのブラック・ミュージックを聞いて育ったヴァン・モリスンは 1970 年のこのアルバムでその両方の要素を理想的なまでに合体させました。特に LP の A 面はほとんど組曲のように流れる 100 点満点の内容です。決して色あせない必聴の音楽です。

PHONO KAMAKURA

PETER BARAKAN'S 30+ RECOMMENDED VINYL RECORDS

※記載の西暦はマスターリリース年です。

SELECTION — 14



The Wailers

Catch A Fire
(1973)

ボブ・マーリーたちが国際的に活動するきっかけをつくったこの作品が発表された1973年にはレゲェはまだジャマイカ以外ではほとんど注目されていませんでした。それを考えると一般の音楽ファンが聞きやすく感じる工夫が若干施されているのは大正解でしたが、曲はどれも強烈です。

SELECTION — 15



Toumani Diabate

Kaira
(1988)

コラという楽器は西アフリカで使われるハープのようなとても澄んだ音の弦楽器です。本来は儀式などで使われますが、トゥマニ・ジャバテは1988年に、まだ23歳でソロ演奏によるこの傑作を作りました。時々3人でやっているように聞こえるほど演奏技術は凄まじいものです。

SELECTION — 16



Aretha Franklin

Aretha's Greatest Hits
(1971)

1960年代のソウル・ミュージックはほとんどシングル盤として聞かれていたので個別のアルバムよりもどうしてもベスト盤の方が満足度が高いと思います。67年から71年の間に女性ヴォーカルの概念を新たにしたアリーサ・フランクリンが連発したヒット曲の素晴らしさは他を寄せ付けないほど格別です。

SELECTION — 17



The Animals

The Best Of The Animals
(1966)

1960年代のイギリスから次々と現れたグループの中で、アニマルズは自作よりカヴァーの曲が多いけれど、選曲のセンスと演奏力で群を抜いていました。「朝日の当たる家」、「悲しき願い」、「朝日のない街」など、印象的な邦題があるのは日本人の心にも刺さった証拠でしょうか。

SELECTION — 18



Cassandra Wilson

New Moon Daughter
(1996)

女性のジャズ・ヴォーカルというと自ずと浮かぶイメージを1990年代半ばにカサンドラ・ウィルスンは覆しました。ピアノのないミニマルな楽器編成、U2からハンク・ウィリアムズ、マンキーズまでの素材を低くハスキーな声で解釈した96年のこのアルバムは画期的な音楽です。

SELECTION — 19



Robert Johnson

King Of The Delta Blues Singers Vol 1
(1961)

1930年代に録音されたロバート・ジョンスンのギター弾き語りのブルーズは今や伝説となっていますが、このLPが発売された60年代には彼についてほとんど知られておらず、謎の人物でした。しかし、彼の歌声の切なさ、そしてスライド・ギターの巧みな演奏は多くのファンを獲得しました。

SELECTION — 20



Elvis Costello

My Aim Is True
(1977)

イギリスでパンク・ロックが流行っていた1977年、バディ・ホリーのような黒縁の眼鏡をかけたちょっとお宅っぽい感じの青年がギターを弾く写真のジャケットはまず好奇心をそそりました。皮肉めいた歌詞と一発で印象に残るメロディのセンスを持ったすごいソングライターの登場でした。

SELECTION — 21



Paul Butterfield Blues Band

Paul Butterfield Blues Band
(1965)

シカゴ・ブルーズなしには今のロックは考えられませんが、その黄金時代だった1950年代には白人にはほとんど聞かれていませんでした。当人たちから直に教わったポール・バタフィールドとその仲間が1965年に作ったこのデビュー作はぼくにとって衝撃的なブルーズ入門となりました。

SELECTION — 22

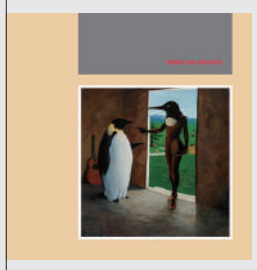


Grateful Dead

Grateful Dead (Skull & Roses)
(1971)

あらゆるルーツ・ミュージックを秀でた即興のセンスで料理したグレイトフル・デッドは伝説のバンドでした。楽曲のよさとライヴの勢いを兼ね備えたこの1971年の通称「骸骨とバラ」は人気の高いアルバムです。ジェリー・ガルシアのギターを聞くといつも幸福感に浸れます。

SELECTION — 23



Penguin Café Orchestra

Penguin Café Orchestra
(1981)

クラシック界の現代音楽を背景に持っていたサイモン・ジェフスは世界のフォーク・ミュージックや民族楽器にも興味があり、そういった要素を全部盛り込んだユニークな「楽団」を結成したのです。柔らかい響きがあるのでちょっと実験的なことをやってもすべて楽しく聞けてしまいます。

SELECTION — 24



Ry Cooder

Into The Purple Valley
(1972)

ヒット曲は全くありませんが、ライ・クーダーはギタリストとしてもルーツ・ミュージックの解釈者としても極めて重要なアーティストの一人です。1972年に出たこのアルバムのお陰で彼が取り上げているウディ・ガスリーやレッド・ベリーなどの古いレパートリーが馴染みになりました。

SELECTION — 25



Rolling Stones

Exile On Main Street
(1972)

60年以上のキャリアを持つローリング・ストーンズはもちろんアルバムの数も多く、世代によって好まれるのは様々ですが、荒々しいところがあるにせよ、1972年のこの2枚組は個人的な大好物です。ストーンズの黄金時代といえる時期の最後に当たるといえば怒られるかも知れません。

SELECTION — 26



Stevie Wonder

Innervisions
(1973)

70年代前半の約5年間、ソウル・ミュージックの概念を変えてしまったスティーヴィ・ワンダーは20代なのにすでにヴェテランの歌手でした。次々と出した傑作は甲乙つけ難いですが、強いていえば73年のこれになりますかね。演奏の大部分が一人だけの多重録音であることにも脱帽します。

SELECTION — 27



Curtis Mayfield

Superfly
(1972)

60年代の公民権運動のころ、ゴスペルに影響されたポジティヴなメッセージを持ったヒット曲を連発したインプレションズ。そのリーダーのカーティス・メイフィールドは70年代にはソロ活動を開始、72年に名曲を多く含むこの映画のサウンドトラックで独特のスタイルを確立しました。

SELECTION — 28



Bobby Charles

Bobby Charles
(1972)

知られざる名盤の代表格がこのアルバムです。ルイジアナ州で主にソングライターとして活動していたボビー・チャールズはひょんなことで1972年に北部の山村ウッドストックに漂流して、そこを拠点にしていたザ・バンドのメンバーを中心に緩めの名盤を築きました。恍惚の音楽です。

PHONO KAMAKURA

PETER BARAKAN'S 30+ RECOMMENDED VINYL RECORDS

※記載の西暦はマスターリリース年です。

SELECTION — 29



Talking Heads

Remain In Light
(1980)

1970年代後半のニュー・ウェイヴの時期に現れたニューヨークの一風変ったアーティなロック・バンドだったトーキング・ヘッズはプロデューサーのブライアン・イーノに紹介されたファンクとアフロビートの影響で、1980年にこの凄まじく衝撃的な作品で新時代の幕開けを宣言しました。

SELECTION — 30

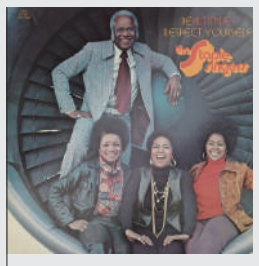


Traffic

John Barleycorn Must Die
(1970)

イギリスでユニークな存在だったトラフィックの中心人物スティーヴ・ウィンウッドはロックも、フォークも、ジャズも、ラテンも、広範囲にわたる音楽的好奇心を持っていて、このアルバムを出した1970年にはまだ22歳だったのに驚くほど成熟した名盤を残しました。

SELECTION — 31



Staple Singers

Be Attitude
(1972)

1950年代から家族のゴスペル・グループとして活動してきたステイプル・シンガーズは、メッセージを持ったソウル・ミュージックを展開するようになり、1972年にこの傑作を発表しました。メイヴィス・ステイプルズのハスキーな歌とファンキーなバックの演奏が光ります。

SELECTION — 32



The Beatles

Rubber Soul
(1965)

ビートルズはすべてリアル・タイムで聞いて育った世代なので、どの曲も脳裏に焼き付いていますが、アルバムとしていちばん好きなのは1965年の「ラバー・ソウル」です。ボブ・ディランからの影響もあり、それまでより歌詞に深みが生まれ、そのお陰で楽曲の充実度は更に上がりました。

SELECTION — 33



Tom Petty & The Heartbreakers

Tom Petty & The Heartbreakers
(1976)

1976年に出たトム・ペティのこのデビュー作を聞いて打ちのめされました。若干突っ張ったイメージのジャケットにもかかわらず、ハーモニーもきれいなロック・バンドでしたが、メロディと勢いをバランスよく持った曲、そしてバーズを思わせる歌と12弦ギターが素晴らしい響きです。

SELECTION — 34



Jimmy Cliff/ Soundtrack

The Harder They Come
(1972)

ジャマイカを舞台にした1972年の劇映画「ハーダー・ゼイ・カム」は歌手を目指すジミー・クリフが挫折して犯罪の道に巻き込まれて行く物語ですが、ジミー自身の名曲を4曲含むそのサウンドトラックに収録されている珠玉のレゲェはいつ聞いても気分が上がります。最高のサウンドトラックです。

SELECTION — 35



Santana

Abraxas
(1970)

ラテン音楽をブルーズ・ロック風に展開したサンタナはウッドストック・フェスティヴァルの映画のハイライトとなり、一気に話題のバンドになりました。1970年に出したこの2作目には「ブラック・マジック・ウマン」や「オイエ・コモ・ヴァ」という名演が含まれています。

SELECTION — 36



Chuck Berry

Golden Decade
(1967)

初期のロックンロールでは独特のギター・スタイルと誰よりも歌詞の充実した曲を多く作ったチャック・ベリーは特に60年代のイギリスのミュージシャンたちに計り知れない影響を与えました。70年代初頭に発表されましたこの2枚組のベスト盤は当時のぼくにとって宝物でした。

SELECTION — 37



Ray Charles

A 25th Anniversary In Show Business Salute To Ray Charles(1971)

ソウル・ミュージックはゴスペルの情熱とメロディにリズム・アンド・ブルーズの洗練を加えてできたスタイルです。その最初の形を模索したのは50年代のレイ・チャールズで、若いころの彼が放った画期的な音楽は今や教科書に値するようなものです。この70年代のベスト盤は超お薦め！

SELECTION — 38

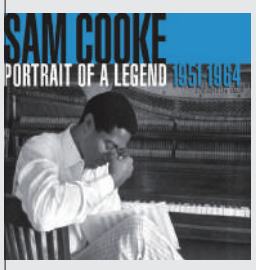


James Brown

Solid Gold
(1977)

レイ・チャールズの直後にデビューしたのはジェイムズ・ブラウン。レイが持っていた洗練はなく、力で勝負するタイプですが、60年代半ばから彼が新たに切り開いたファンクの道は後のすべてのブラック・ミュージックにとてつもない影響を及ぼしました。やはりベスト盤がいいと思います。

SELECTION — 39



Sam Cooke

Portrait Of A Legend
1951-1964
(2003)

3人目のソウルの立役者はサム・クックです。彼は10代から名門ゴスペル・グループのリード・ヴォーカルを経て、57年にポップ・ミュージックの世界に転向したら批判もされましたが、柔らかいコブシの効いた独特の歌に誰も抵抗できませんでした。若くして亡くなった短いキャリアのベストです。

SELECTION — 40



Otis Redding

The Best of Otis Redding
(1984)

形になった後のソウル・ミュージックを引っ張って行ったのはディープな感情で聞き手をノック・アウトさせたオーティス・レディングでした。特にスロー・バラードでは類を見ないフィーリングを持った彼も若くして、1967年末の飛行機事故のため、たった26歳でこの世を去りました。

SELECTION — 41



Georgie Fame

Fame At Last
(1964)

13歳のぼくに渋めのリズム・アンド・ブルーズの魅力を伝えたのは1964年に作られたこのアルバムでした。当時のジョージィ・フェイムは21歳、オルガン奏者としても才能があり、ジャズ寄りのR&Bの粒ぞろいの曲を選ぶセンスも抜群で、軽やかな洗練された歌もカッコよかったです。

SELECTION — 42



Lovin' Spoonful

Do You Believe In Magic?
(1965)

60年代初頭のフォーク・リヴァイヴァルに関わっていた多くの若いミュージシャンたちはビートルズの登場の衝撃によってエレキ・ギターを手にして、フォークの曲をポップに展開する試みを始めました。特に魅力的だったのはジョン・セバスティアン率いるラヴィン・スプーンフルでした。

SELECTION — 43



J.J. Cale

Naturally
(1972)

1970年に出たエリック・クラプトンの初のソロ・アルバムで彼が取り上げた「アフター・ミッドナイト」の作者として知られたJ.J. ケイルはそれまでスタジオ・ミュージシャンでしたが、72年のデビュー作で湿度の高そうな軒先でゆったりとギターを弾きながら歌う名盤をさりげなく発表しました。